審査の結果の要旨

氏名　大津　若果

本論文は、ルイス・バラガンとファン・オゴルマンの２人の建築家を研究上の軸として、20 世紀のメキシコ建築界における機能主義の受容と地域主義の涵養について詳細に論じたものである。

序章と結章を除く本論は、全９章から構成される。

第１章では、本研究が扱う 20 世紀メキシコの社会背景として重要な意味を持つメキシコ革命と農地改革がオゴルマン、そして特にバラガンに与えた影響が明らかにされた。

第２章では、メキシコにおける伝統的な建築教育を担ったサン・カルロス・アカデミーが取りあげられ、メキシコ革命に伴う授業科目の変化、ヨーロッパからの近代建築の受容の状況が、資料に基づいて論じられた。

第３章は、第４章の前提となる章で、メキシコにおけるセメントの受容が論じられた。鉄筋コンクリートという新しい技術の受容が、雑誌『セメント』や『トルテカ』のような建築ジャーナリズムによって取りあげられることにより、ヨーロッパの機能主義建築の直接的な受容の契機となったことが明らかにされた。

第４章では、機能主義建築家として活躍した前期（1929～34 年）のオゴルマンの作品と活動を中心として、メキシコで花開いた機能主義建築がいかなるものであったか明らかにされた。

第５章では、1930 年代後半のオゴルマンとバラガンの建築を取りあげ、そこに早くも単なる機能主義の受容ではなく、それに対する批判的姿勢が現れてきていることが、その社

会背景も論じつつ、明らかにされた。

第 6 章では 1940 年代における、アメリカ西海岸やヨーロッパの特にバウハウスとメキシコの建築家たちとの関わりが具体的に明らかにされた。特に興味深いのは、むしろこの時期、ヨーロッパからメキシコを訪れたマイヤーやチェットが、メキシコにおける地域主義の胎動に強い影響を受けていたことが明らかにされた点である。

第 7 章では一転して、バラガンによるペドレガル溶岩地帯の住宅開発計画について論じられる。ここではデベロッパーとしてのバラガン像が扱われ、彼の地域主義建築家としての成功の原点がここにあったことが明らかにされた。

第 8 章では、後半期のオゴルマンが扱われる。彼もまた、初期の機能主義者としてのスタイルから、地域主義者としてのスタイルに移行した。とくにここでは、ペドレガル溶岩洞窟のオゴルマン自邸と大学都市の中央図書館の壁画が象徴的な存在として論じられた。

第 9 章では、メキシコにおける機能主義の受容と地域主義の涵養が、20 世紀後半のメキシコにいかなる建築的成果をもたらしたがまとめられた。

本論文は、20 世紀前半のメキシコ建築に、ヨーロッパの新しい建築潮流としての「機能主義」がいかなる影響を与えたのか、そしてメキシコ建築界が自国の伝統と折り合いを付けながら、いかにして「地域主義」を確立していったのかを論じたものである。ファン・オゴルマンとルイス・バラガンという二人の建築家については、わが国でもその作品などはよく知られてきたものの、彼らが 20 世紀の建築史のなかでどのように歴史的に位置付けられるのかということについて、まとまった研究は皆無であったといえる。さらに本研究が、メキシコ国立自治大学美学研究所を中心とした現地での綿密な一次資料の調査によるきわめて貴重な資料群の発掘とそれらの資料の読解に基づく研究である点でも、その意義と重要性は高く評価される。

よって、本研究は博士（工学）の博士学位請求論文として合格と認められる。